Part 2

特集―鹿島の人と技術

人を育て、技術を磨くこと、社内外の知見を有機的に結びつけることにより、
価値創造の基盤をより強固なものとし、魅力あるサービスの提供を実現しています。

特集1
現場が育てる鹿島のエンジニア …… 25

特集2
流通倉庫開発のグローバル展開 …… 29

特集3
The GEARの目指すスマートウェルネスの未来 …… 31

特集1
現場が育てる鹿島のエンジニア

鹿島は事業領域や規模の拡大を踏まえ、人材育成に注力しています。現場を中心に若手・中堅の意欲や業務習得状況に合わせた教育訓練を施し、専門人材をマネジメントできる所長へ成長する道筋を示しています。東京都心と日本の空の玄関口を結ぶ鉄道新線「羽田空港アクセス線」のトンネル工事と、国産半導体の復権を目指すRapidus（ラピダス）の最先端生産施設「IIM-1」（北海道）の建設という2つの大規模プロジェクトで働く鹿島のエンジニアが、いかに技術や思いを受け継いでいるのかを語りました。

シールドトンネル工事に集う若手、中堅、ベテラン
―羽田空港アクセス線

鹿島は職種に応じて人材育成の方針を定めています。機電系は3年次までの「基礎力育成」、7年次までの「応用力育成」の各期間を経て、13年次までに管理能力を育成。土木系は入社後6年間を「重点育成期間」として施工管理や設計の基礎を学び、13年次までの「成長促進期間」には専門性を深めるとともに、所長に必要な知識を修得します。

キャリアの入り口

2023年に入社した鬼頭沙知担当は大学時代に機械科で学び、鹿島の企業説明会に参加したことがキャリアの入り口になりました。「横浜環状南線公田笠間トンネル工事の見学に行き、シールドマシン（掘削機）の機械設備の壮大さと中央制御室のシステムの精密さを目の当たりにして、土埃舞う建設現場の印象が180度変わりました。機電系社員が操作を担っているので、機械科出身でも工事に直接携わることができると知ったことが入社のきっかけです」。

東京土木支店で半年間の研修後、江東ポンプ所工事事務所で現場管理の基本を習得。メカトロニクス・ソリューション部で施工管理ガイドの作成などに携わりながら現場を回り、2024年4月に念願かなって羽田空港アクセス線シールドトンネル工事（以下、羽田アクセス線工事）に配属されました。「今は2026年からの掘削開始を目指し、発進基地内に直径11.8mの円形カッターを搭載したシールドマシンを現地で組み立てる計画の立案を担当しています。経験が少ないので、必要な維持管理や起こり得るトラブルを想像し、情報を整理する難しさを感じています」。先輩社員の助言を受けながら、シールドマシンの稼働の鍵を握る装置の仕様検討にも参加しました。「技術開発の進め方や機械構造など多くのことを学びました。まずはこの現場を無事故でやり遂げることが目標です。機械の仕組みをより熟知し、粘り強く現場と向き合うことで、信頼されるエンジニアになりたいです」。

機電担当
鬼頭 沙知

施工と設計を知り、俯瞰する力に

現場での日常的な教育に加え、設計やITなどの専門分野は集合研修を実施し、幅広い経験が得られるジョブローテーション制度も用意しています。羽田アクセス線工事の梶川初太郎次長は入社後、下水道や都市ガス導管などのシールドトンネルの現場で施工管理の経験を積み、13年目から9年間は土木設計本部で発注者への技術提案などを担ってきました。「首都高速中央環状品川線の工事で、セグメント（トンネル内壁を覆う構造物）開発に携わったことが転機です。現場で得た経験を反映し、設計段階から作業負担を抑え、収益に配慮できるよう考えてきました」。

2024年4月からは羽田アクセス線工事で、対外協議を担う「監理技術者」を務め、発注者や周辺施設と工事日程などの調整に取り組んでいます。「現場と設計の両方を知り、技術的な知識を深めるとともに、プロジェクト全体を俯瞰する力を養ったことが、今の仕事に活かされています。施工技術を提供するだけではなく、関係者と信頼関係を築き、誠実に対応することで要求性能を満たす仕事を達成したいと思います」。

梶川次長がその姿勢を学んだのが、羽田アクセス線工事の柴田佳彦所長でした。中央環状品川線の現場でとも

工事概要

プロジェクト名	東京国際空港空港アクセス鉄道シールドトンネル他築造等工事
発注者	国土交通省関東地方整備局東京空港整備事務所
設計	パシフィックコンサルタンツ
施工	鹿島・東亜・あおみ特定建設工事共同企業体
工期	2024年1月～2028年1月

に働き、当時の監理技術者として関係者と信頼関係を築いていく様子が印象的だったと振り返ります。柴田所長は「トンネル工事は換気や消火などの設備事業者も参画しますが、プロジェクトをリードするのは鹿島です。安全・安心・安定した施工で社会と顧客の信頼獲得を目指します」と話します。

1990年代から続く建設人生の8割をシールドトンネル工事の現場で過ごし、技術の進化や施工条件の高難度化を経験してきました。「掘り進む先を目視することができないシールド工法は、あらゆるモニタリング技術や自らの五感も駆使し、地盤状態を『見える化』することが重要」と考えています。シールドトンネル工事は一時期停滞し、技術継承に懸念があるなか、この経験則を言葉で教えるとともに、マニュアル化やシステムの開発にも取り組んできました。

「人材育成がこの現場の大きな使命です。若手・中堅職員には積極的に提案、挑戦していくことが大切だと伝えています。失敗を恐れず、ものづくりの大変さと面白さを早くつかみ取ってほしいと思います」。

次長（監理技術者）
梶川 初太郎

所長
柴田 佳彦

半導体工場建設の草分けから次世代へのバトン
―Rapidus IIM-1建設計画

建築系は入社後5年までの重点育成期間を皮切りに、6～9年次の役職任用準備、10～13年次の役職任用の各期間を経て、14年目以降の所長任用に備えます。新入社員らの導入期には集合住宅や事務所など基礎となる工事を経験し、内外装など各工種を学びます。

大規模プロジェクトで視野広げる

大学時代に設計を専攻した小森ゆりこ担当は在学中に参加した鹿島の見学会で、「職人さんと現場で建物を造り上げていく施工管理の仕事に魅力を感じ、入社を決めました」。2022年に入社後、関東支店を経て、翌2023年8月にIIM-1建設計画工事に着工から配属されました。本棟に電力を送る特高変電棟を担当し、地盤改良から基礎、躯体、内外装、検査まで全工種を約10か月で経験しています。半導体業界の激しい開発競争を反映し、超短工期の作業が求められるうえ、「最初に完成する棟だったので、ロールモデルがないなかで工事を進める難しさがありました。他の棟の担当者とも密に連携を取り、やり直しがないよう心がけました」。

ピーク時には約5,500人が働いた大規模な現場に配属当

初は不安もありましたが、多くの先輩社員と出会ったことで視野を広げています。「役割が細分化されているなかでも、活躍する先輩社員は誰がどんな仕事をしているのかを的確に把握していました。経験と知識を深め、『何を頼んでも大丈夫』と思われる存在になりたいです」。

2024年3月に赴任した佐藤雄太工事主任は役職任用準備期間となる入社9年目。大工の祖父の影響でものづくりに憧れ、ホテルや医薬品工場の現場を経験してきました。「大規模な建物の建設に携わりたいと思い、鹿島を志望しました」。希望がかなった形のIIM-1では本棟の鉄骨から外装、内装と工事の進捗に合わせて各工種の施工管理を順次担当しています。「1つの棟が出来上がる過程を身をもって知ることができました。次は工事課長代理として、全体の工程をマネジメントできるようになりたいと思います」と先を見据えています。

特高変電棟担当(当時)
小森 ゆりこ

工事主任
佐藤 雄太

液晶ディスプレー部品工場からIIM-1へ

鹿島は2022年に半導体メモリー大手キオクシアの四日市工場第7製造棟(三重県)、翌2023年に半導体受託製造大手の台湾積体電路製造(TSMC)が過半を出資するJASM第一工場(熊本県)を相次いで完工させたのに続き、IIM-1の建設を受注。2025年4月に建屋の約半分を占める試作ラインを予定どおり稼働させ、2027年の量産開始に向け工事を続けています。

IIM-1建設計画工事の高野貢一統括所長は「ラピダスは日本がかつて半導体業界をリードしていた時代の人材が、若手・中堅に技術を継承することを目指しています。鹿島にとっても次世代にバトンを渡す重要なプロジェクトです」と力を込めました。

1987年の入社以来、中部地方を中心に電子部品工場などの工事を手がけ、2003年から液晶ディスプレー部品工場の現場で所長を務めたことがキャリアの方向性を決めました。「精密な加工・処理が求められる電子部品や半導体の製造にはマイクロ(100万分の1)m単位の微粒子も除去するクリーンルームが必要です。建物の要求性能も明確で、結果が数値で評価されることに技術者として魅力を感じました」。

医薬品工場や最先端液晶ディスプレー工場の現場でクリーンルームのノウハウを蓄積するなか、所長として最後に残った挑戦が半導体です。日本メーカーの衰退に伴って施設の建設件数も一時低迷しましたが、近年の需給逼迫で生産需要が拡大。鹿島は設計・施工一丸となって受注獲得に取り組み、キオクシア四日市工場で道を切り拓きました。半導体工場の現場を初めて経験した高野統括所長は「液晶ディスプレーなどと比べ、圧倒的に工事量が多いことを実感しました。基板を洗浄する水や清浄度を保つ空調など設備工事の割合が高いので、設備業者ともチームになって取り組まなければなりません」と語ります。

統括所長
高野 貢一

IIM-1ではその経験を活かし、クリーンルームや耐震性など半導体工場特有の施工技術を積極的に伝えています。大規模な現場で全体に共通認識を行き渡らせるため、高野統括所長が思いを託すのが役職任用期間にある所長候補の中堅です。

中核人材を所長に

半導体工場建設の鍵となる設備工事を担う日比野貴生設備課長代理は「通常の空調・衛生・電気設備に加え、特殊なガスや薬液、水処理までほかの工事では範疇に入らない知識が求められます」とその難しさを実感しています。大学院で環境工学を学び、2012年の入社後は電子部品工場などの現場で10年以上の経験を積みました。IIM-1では設備CM(コンストラクション・マネジメント)という新たな役割に挑戦しています。設備工事が別途工事の場合、設備業者間の調整は本来、発注者が行いますが、発足間もないラピダスは工事の根幹を請け負う鹿島に依頼。多くの設備業者が関わり、工程などで各社の主張が対立することもあるなか、「過去の知見を活かして着地点を探り、主体的に解決に導く人間力が養われました。あらゆる職種を経験し、最終的に所長を目指したいと思います」。

キオクシア四日市工場の現場から高野統括所長とともに働く赤松政成工事課長代理は、ランドマークとなる建物の建設を目指し2014年に入社しました。東京建築支店や横浜支店で施工管理の経験を積み、6年目から中部支店で工事全体の計画・管理を担当。現在はIIM-1本棟のほか、水処理や特高変電など複数の棟が建つ計画全体の調整役を務めています。「現場は人がすべて」と語る高野統括所長のコミュニケーションを重視する姿勢から学び、「関係者が多いので各担当者の意見がぶつかることもありますが、コミュニケーションを密に取ることで全員が同じ方向を向くよう心がけています」。

設備課長代理
日比野 貴生

工事課長代理
赤松 政成

鹿島は大規模で超短工期のIIM-1試作ラインの建設を成し遂げ、半導体工場の建設で存在感を発揮しています。高野統括所長は「専門性や経験が問われる工事なので、赤松らプロジェクトの中核を担える人材が早期に抜擢され、更に活躍してほしいと考えています」と期待を寄せます。赤松工事課長代理は「早く所長になり、いろいろな人の力を合わせて鹿島だから成功したと言われる仕事をしたいと思います」と決意を語りました。

主な資格取得者数(単体)

技術士	988人
一級建築士	2,470人
一級土木施工管理技士	1,892人
一級建築施工管理技士	2,702人

(2025年4月現在)

プリンシパル・アーキテクトから学んだ「周囲を巻き込む力」

IIM-1などの建設では、鹿島の設計・施工の強みが活かされています。建築設計本部で半導体工場などを長年手がけてきたプリンシパル・アーキテクトと、技術を受け継ぐ中堅が思いを語りました。

建築設計本部プリンシパル・アーキテクト
本山 浩司

「半導体業界は専門用語が多く、超短工期に対応した進め方も独特なので経験しなければわかりません。提案の準備期間が数日というケースもあり、短期間に顧客と会話を積み重ね信頼を得ることが重要です。そのため、若手には2～3年目からプレゼンを担当させてきました。最初は専門的な質問に答えられず苦労しますが、世界と勝負する顧客と一緒に仕事をする面白さを感じてほしいと思います」。

建築設計統括グループ生産統括チーフ
糸長 大佑

「入社してすぐ本山グループに配属され、当初は顧客や先輩社員から教えてもらうことばかりでした。しかし、先輩社員が周囲を巻き込んでプロジェクトを進めていく姿を見て、一人で悩むのではなく、チームで仕事をする大切さを学びました。IIM-1では外構の設計を担当し、千歳市とも連携して自然を活かした設計を目指しています。鹿島ならではの大規模プロジェクトに、今後も挑戦していきたいと思います」。

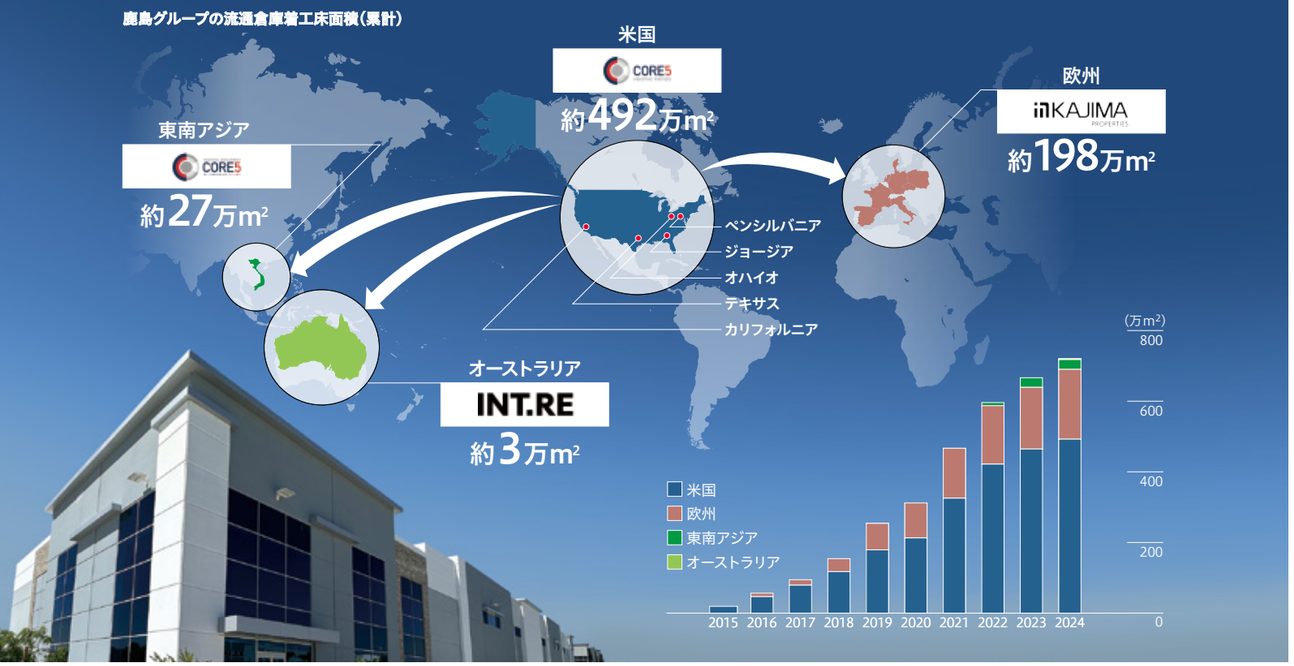
糸長チーフ(左)と本山プリンシパル・アーキテクト

特集2

米国から欧州、東南アジア、豪州へ
流通倉庫開発のグローバル展開

鹿島は不動産開発事業の拡大に向け、流通倉庫開発のグローバル展開を進めています。1980年代から米国の傘下企業が用地取得から施設企画、テナント企業の誘致、稼働まで一貫して手がけ、確かな実績とノウハウを獲得。Eコマースの普及やサプライチェーン（供給網）の深化で流通倉庫の重要性が高まるなか、安定的に高収益を生み出すビジネスモデルを欧州や東南アジア、豪州へと広げ、更なる成長を目指しています。

鹿島グループの流通倉庫着工床面積（累計）



地域プラットフォーム

鹿島の流通倉庫開発の中核となっているのが米ジョージア州アトランタに本社を置くコア5・インダストリアル・パートナーズ（Core5）です。カジマ・ユー・エス・エー（KUSA）傘下で流通倉庫開発を展開してきたメンバーが2015年に新たに設立し、これまで10年間の新規着工床面積は累計約492万m²に達しています。

成長の最大の要因は、地域に根ざしたネットワークを持つ専門人材です。Core 5は本社の他、物流網の中心地であるカリフォルニア、テキサス、オハイオ、ペンシルバニアに4つの地域拠点を展開しています。KUSAの資金基盤を背景に開発実績を積み上げ、各地のニーズに精通する流通倉庫開発の専門人材が事業の強固なプラットフォームを構築。事業の反復性を通じて地元の仲介業者や建設業者らパートナー企業の信頼を獲得し、優良案件につながる開発用地に関する情報がいち早く集まる態勢を構築しました。

また、景気サイクルの変化を意識した開発案件の慎重な仕込みも事業の安定を支えています。過去にはITバブル崩壊、リーマン・ショックなどで倉庫需要の急速な縮小を経験したことから、個別案件の新規仕込みに際しては、地域別に細分化されたサブマーケットごとの需給バランスに関するデータ等に加え、手持ち案件のリーシング状況と販売状況などをにらみながら、資金効率性と収益性を重視して慎重に進めています。

Middletown（ペンシルバニア州）

短期回転型ビジネス

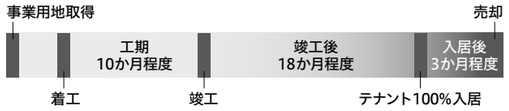
米国の流通倉庫は平屋建てが多く、オフィスや集合住宅などと比べて工程を抑えられる傾向があります。Core 5は用地取得・着工から竣工までの期間を10か月程度、投資から稼働後に売却して資金を回収し、再び投資するまで3年程度という短期回転型のビジネスモデルを確立しました。この結果、アトランタの商業不動産開発面積でベスト3（2020～2021年）に入るなど各事業エリアで存在感を発揮。2022～2024年度3か年累計の売上高は2,700億円以上、当期純利益は450億円以上と高い収益構造を構築し、不動産開発事業の収益拡大と投資効率向上を牽引しています。

欧州でも2016年に流通倉庫開発大手パナトニ・ヨーロッパ社と共同事業を開始しました。以前は現地の当社施工部門の施主であったパナトニと開発分野でも新たに連携し、ポーランド、チェコ、ドイツ、オランダ、フランス、スペイン、イタリアの7か国でプロジェクトを手がけています。これまでに34件の開発に取り組み、20件を売却（2025年3月末時点）し、事業を成長軌道へと乗せています。

製造拠点が集積する東南アジアでは、2022年にベトナムで産業系不動産ブランドであるコア5・ベトナム（Core5 Vietnam）を立ち上げました。現地でニーズの大きい貸工場のマーケットに対し、米国の流通倉庫事業で培った実績や信用力を訴求し、北部の港湾都市ハイフォンなどに3物件を開発しています。シンガポールでは冷凍冷蔵倉庫1物件、オーストラリアでも2024年に、南東部の大都市メルボルン近郊で第一号案件の開発をスタートさせています。

国や地域によって参入形態や手法は異なりますが、鹿島グループは短期回転型のビジネスモデルを維持しつつ、現地の企業や人材と手を携えて流通倉庫開発を進めています。今後も成長領域の一つとしてグローバル展開を加速し、一層の収益拡大と投資効率の向上につなげていきます。

物件着手から売却まで3年程度の短期回転型



国内は「KALOC®」ブランドで市場参入

日本でも流通倉庫の需要が増加するなか、鹿島は都市近郊の物流ニーズを捉え、「KALOC※」のブランド名で市場に参入しています。第一弾として2024年10月に宮城県富谷市に「KALOC富谷」、2025年1月に東京都大田区に「KALOC南六郷」が相次いで完工。企画開発から設計・施工まで一貫して行う強みを活かし、荷物用エレベーターを多く設置するなどテナントの利便性に配慮した施設を提案しています。鹿島は今後もブランドの展開を進めていく方針です。

※ 鹿島物流センター「Kajima Logistics Center」（カロック）

KALOC南六郷

Core 5創業者　各地域の市場動向を熟知するチームが鍵

我々は創業以来、流通倉庫開発に特化し、収益性の高い事業に注力してきました。かつては小売店向けの床面積2.5万m²程度の配送施設が開発対象の中心でしたが、Eコマースが市場の牽引役に成長した現在は床面積10万m²超の中核物流拠点や、都市周辺部の宅配センターなどサプライチェーンで鍵となる多様な需要にも対応しています。親会社であるKUSAの信用力を活用できるCore 5は、資金調達面で外部出資者に依存する必要がなく、最適なタイミングで土地を仕込み、開発に着手できることが大きな強みです。また、事業展開する各地域において経験豊富で有能なローカルの人材を、Core5の事業方針を理解してもらったうえで採用していることから、拠点レベルでも会社と社員の目指している方向が一致しているものと自負しています。

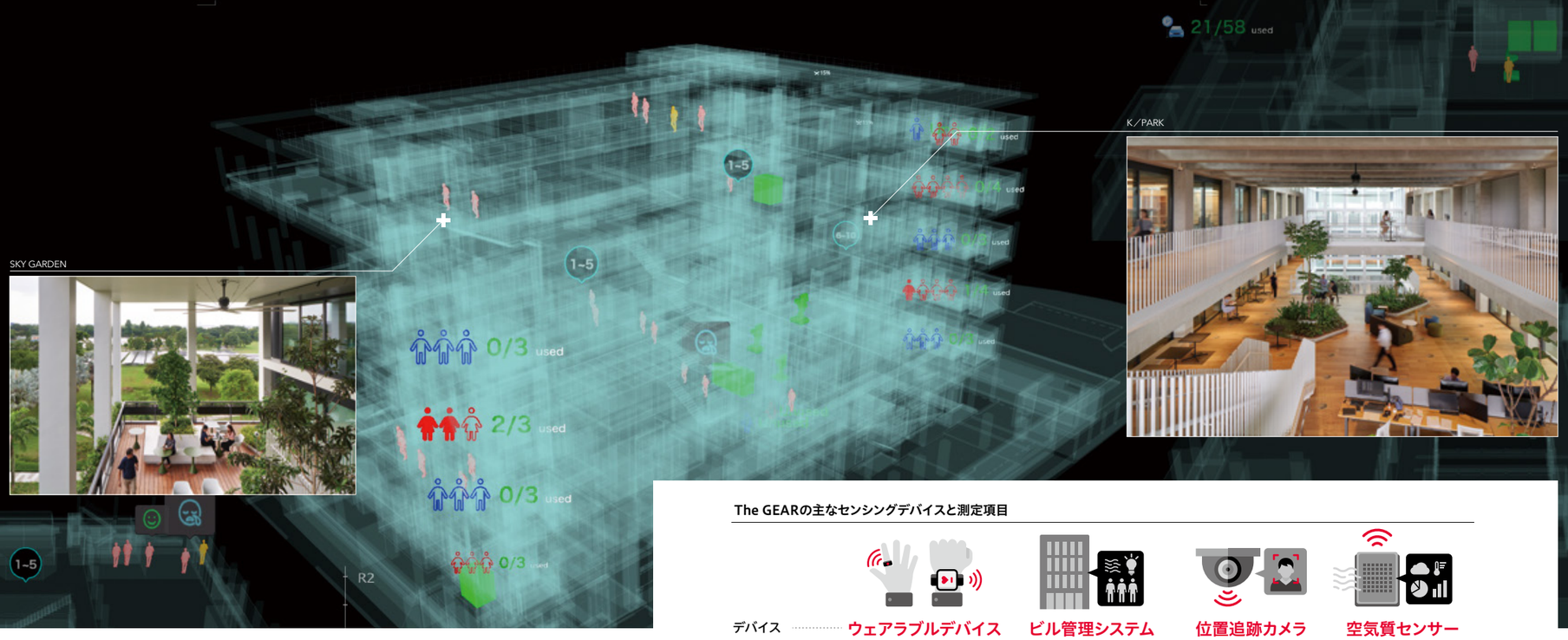
現在の政治的、経済的状況により市場の回復ペースに遅れがみられます。しかし、時代の要請によって変化するリスクに対し、Core5は各地域の市場特性を熟知するメンバーによるチーム力を強みにどんな課題にも対応していけると確信しています。

Timothy J.Gunter
President and CEO

Linda Booker
Executive Vice President and CFO

特集3
The GEARの目指す スマートウェルネスの未来

鹿島はAIやIoTを活用し、省エネルギーや快適な環境を実現する「スマートビル」の研究開発に取り組んでいます。2023年8月にシンガポールに開業したアジア統括拠点「The GEAR（Kajima Lab for Global Engineering, Architecture & Real Estate）」ではビル丸ごとを実験空間と位置づけ、室内の温度や照明から、働く人の行動、生体情報まで膨大なデータの収集・蓄積・分析を始めています。省エネ・脱炭素や建物管理の効率化にとどまらず、一人ひとりの心と身体のウェルネスを推進するスマートビルの未来を研究開発の最前線で探りました。



The GEARの主なセンシングデバイスと測定項目

	ウェアラブルデバイス	ビル管理システム	位置追跡カメラ	空気質センサー
デバイス	ウェアラブルデバイス	ビル管理システム	位置追跡カメラ	空気質センサー
測定項目	心拍、体温、活動量、ストレスレベル	空調・照明制御、施設利用状況	表情、ロケーション、人数	気温、湿度、PM2.5 、騒音

働く人、環境、社会にやさしい

「How about going to the SKY GARDEN?（スカイガーデンに移動しませんか）」。The GEARで働く従業員がパソコンに向かって業務に没頭していると、手元のスマートフォンにメッセージが届きました。施設内の行動追跡カメラや指輪型のバイタルセンサーのデータをもとに、長時間の集中作業でストレスは増加し、ソーシャル（社会性）指標が低下しているとAIが判定して送ったものです。メッセージによって緑に包まれた開放的な共有スペースへの自発的な移動を提案し、リラックスして同僚と交流するよう促しています。

鹿島のアジア本社とともに、研究開発センターやオープンイノベーションハブの機能を併せ持つThe GEARは働く人、環境、社会のいずれにもやさしいスマートビルを目指し、多くの先進的な設計や取組みを導入しました。人の特性や心理から行動を誘導する「ナッジ」理論に基づくスマホのメッセージの他、AIで人流を解析し、空調・照明を効率化する自動制御システム、直射光を防ぎつつ自然光のみで照らされる吹抜け空間など、意識下の疲労や不快感まで考え、快適性と省エネの両立を図っています。

また、パナソニック エレクトリックワークス社と共同開設したオフィス空間「Co.worXlab（コワークスラボ）」は、会議中の映像と音声のデータを即時解析し、進行に合わせて空調・照明、気流、香りを制御することで議論を活性化する会議室など知的生産性の向上につながる仕組みを実証しています。

9,000種以上のデータ蓄積

これらの取組みを支えるのがセンシングデバイスです。表情から感情も読み取る顔認証カメラや、大気中の微粒子を検知する空気質センサーなど、地上6階、地下1階建てのビル全体に2,700個以上を設置。1個3～4種類程度の項目を測定しており、計9,000種以上のデータが日々「見える化」され、蓄積されています。

The GEARは、人の健康に焦点を当てた建物・街区の国際的な環境性能評価システム「WELL認証」の最高ランクとなるプラチナを取得、2025年にはスマートビルの認証システム「SmartScore」の最高ランクも獲得しました。設計仕様に加え、室内環境のモニタリングやデータの見える化など運用面の取組みも考慮された結果です。

鹿島がThe GEARを実験空間とする背景には、イノベーションの推進に積極的なシンガポールの政策や風土があります。2014年に当時のリー・シェンロン首相が発表した「スマートネイション」構想のもと、行政サービスやインフラ管理、決済システムなど各分野でデジタル化が進展。政府が認めた行政データは民間にも共有するなどオープン化を進めるとともに、スタートアップ企業や研究開発拠点への支援策を相次いで打ち出しています。

鹿島は1988年に東南アジア統括拠点をシンガポールに設立して以来、現地で建設・開発事業の実績を積み重ね、2013年には鹿島技術研究所のシンガポールオフィス「KaTRIS（Kajima Technical Research Institute Singapore）」を設立。The GEARに統合して以降は、オープン化への理解が進む風土を活かし、人の行動や生体情報を含めたビッグデータの構築と分析に取り組んでいます。

半屋外オフィスでエネルギー消費量9割削減

気候条件や労働環境、技術水準などが刻々と変化するなか、スマートビルの役割も常に進化が求められています。KaTRISは収集・蓄積したデータをもとに、ウェルネスの次の展開を探っています。The GEARでは気流をシミュレーションして風通しを最大化する建物形状を考案し、5～6階の吹抜けに半屋外のワークスペース「K／PARK」を設けました。可動式間仕切りで開閉可能で、心地よい風を感じながら働くことができます。利用者調査では気温28度の熱帯条件にもかかわらず、自然換気と天井ファンの組み合わせの環境が、暑さ・寒さを意識しない「中立」と感じる割合が多くを占めました。これは冷房と天井ファンの組み合わせを上回っています。自然換気では冷房運転時に比べ、エネルギー消費量を86～94%削減できることも確認しました。

KaTRISは検証結果をもとに、半屋外オフィスの東南アジア各国や日本への展開を目指しています。鹿島は社会のニーズを捉え、先端技術を取り入れながら、進化し続けるスマートビルを実現していきます。

多様な人材引きつけるリビングラボ

建物全体を実験・実装空間とするThe GEARは、シンガポールに集まるハイレベルな人材を引きつけています。KaTRISで働く約30人のうち半数近くが多様なバックグラウンドを持つ現地採用の研究員です。2024年4月からKaTRISのスマートビルチームで働くシンガポール出身のシニア・リサーチャー、オリビア・クェクは「The GEARは行動データと心理的洞察を統合し、有意義な研究を可能にしています。社会科学の研究やデータサイエンティストなどの経験をもとに、住空間や労働環境がいかにウェルビーイングに影響するのかを探っています。アイデアを実装できることがThe GEARの魅力です」と語ります。

室内温熱環境を専門とする香港出身のシニア・リサーチャー、チュン・チン・トゥは「実用的な成果とイノベーションの双方を促進する雰囲気が特徴だと感じます。学術機関を中心にキャリアを築いてきましたが、日常的な建物管理の課題解決に向き合うためKaTRISに参画しました。K／PARKを舞台に環境性能とウェルビーイングの研究に取り組み、空調に頼らず、快適に過ごせる半屋外や自然換気の設計の可能性を広げていきたい」と話しました。

KaTRISで働くオリビア・クェク（左）とチュン・チン・トゥ